

まちづくりプロジェクト「むこだん焼き」報告－2021年度

生活美学研究所研究員 藤井 達 矢

1. はじめに

まちづくりプロジェクトは2021年度を初年度として、コロナ禍による社会情勢をにらみながら機会を模索していたが、年度末に「むこだん焼き～陶芸体験ワークショップ」と題して地域の子どもと保護者を対象としたアート・ワークショップを開催した。

筆者は教育学部教育学科図画工作ゼミの活動の一環で、10年以上にわたり武庫川団地（兵庫県西宮市高須町にあるUR団地で、約8,000世帯）の特に自治会と関りを持ってきた。アートと社会の関係を探るという名目で、自治会主催イベントの看板や壁画制作、夏祭りでのア



図1 赤胴車 7890号

ート・ワークショップ、年末年始のイルミネーション展示への参画など、様々な形での実践を行ってきた。それらを通して地域の人と人がつながり新たな関係性が紡がれるとすれば、アートにどのような役割があるのか、アートは何を担うべきなのか、「地域アート」として議論されるその在り方を、改めて検証したいと考えた。

コロナ禍にあって活動休止が続いていた。そんな中、阪神電車本線と当団地を結ぶ武庫川線で長く親しまれてきた「赤胴車」廃車の団地内への移設がUR都市機構によって行われた（図1）。団地のシンボル、そして地域の新しいコミュニティースペースとして活用されることとなり、そこでアートを1つの柱とすべくUR担当者と協議の末、「むこだん焼き」ワークショップを実施する運びとなった。

「社会彫刻」を提唱したヨーゼフ・ボイスは「すべての人間は芸術家である」と言った。それを拡大解釈すれば、社会におけるアートの役割の糸口も見えてきそうである。

筆者はこの武庫川団地で、「共生社会」をテーマとした共同研究にも取り組んでいる。昭和時代に開発された巨大団地の常である高齢化の問題はもちろん、日本語を母語としない外国人の居住も増えてきた。数多の社会課題が重なり合うこの団地で実践を踏まえたりサーチの意義は大きいと考える。今後定期的にアート・ワークショップを重ねながら、アンケートやインタビュー、そして国内各地のアートと関わる団地との情報共有やシンポジウムなども検討していく。

2021年度、まずは団地で気軽にアートに触れることができる、アートの日常化を目指して第一歩を踏み出した。今回は「むこだん焼き～陶芸体験ワークショップ」参加者への簡単なアンケートなどから振り返る。

2. ワークショップ概要

- 日時 : 3月21日(月・祝) 13:30～ ※ただし作品引き渡しは3月26日(土) 16:30
- 場所 : 武庫川団地「赤胴車のある広場」 赤胴車内
- 講師 : 武庫川女子大学 教育学部教授・生活美学研究所研究員 藤井達矢
- 対象 : 幼児～高校生(就学前の幼児は保護者同伴)
- 参加費 : 無料
- 定員 : 12名
- 申込 : 3月21日(月・祝) 11:00より受付(先着順)
- 主催 : 武庫川女子大学生生活美学研究所
- 協力 : UR都市機構・武庫川団地管理事務所



図2 ヘッドマーク掲出

3月12日(土)から26日(土)までの間、UR都市機構によるイベント「出張外庭 SQUARE」が武庫川団地(兵庫県西宮市)の赤胴車広場周辺で開催された。このイベントは、武庫川女子大学と阪神電鉄の協力のもと、赤胴車の車内を一般開放して運転手体験や陶芸教室などを開催するというものであった。また、うめきた地区(梅田貨物駅跡地を産学官連携により新たなまちづくりを進めておりUR都市機構が統括)と生中継でつなぐなどの取り組みも実施し、親子連れなど多くの来場者でにぎわった。

本プロジェクトは、地域に関わる様々な人や組織と協力しながらコミュニティの活性化を目指すUR都市機構との協働で実現した。事前告知としては、UR都市機構武庫川団地ウェブサイトや生活美学研究所ウェブサイトへの情報掲載と併せて、武庫川団地自治会への情報提供が行われ、当日はヘッドマークも掲出された(図2)。

制作に使用する陶芸粘土は「とうくろう」(750g、フジワラ化学株式会社)とした。乾燥時の割れ、焼成時の破損のトラブルが極めて少なく、成形後に素焼きを経ずに透明釉を塗り一度焼きで仕上げることができる。通常は完成まで最短でも2週間程度は必要だが、これは1週間程度で完結する。今回は、成形から乾燥そして本焼きして手渡すまでに6日しかないことや、こどもが主であることから、この製品を使用した。透明釉を塗布せずに埴輪や土偶のような風合いに仕上げることができる。実際にあえて艶を出さずに仕上げた参加者もあった。なお成形作品は自動車で本学まで運搬し、乾燥・焼成は本学教育学部教育学科の学校教育館5階、SE-520陶芸教室で行った。完成した作品は再度自動車で武庫川団地まで運搬した。

コロナ制限下であったために、本学学生(教育学部図画工作ゼミ)のサポート参加は見送った。UR都市機構から3名のサポートを得て実施した(図3)。



図3 赤胴車内部、
後方にUR都市機構スタッフ

3. ワークショップ結果から

定員 12 組としていたが当日早くから申し込みがあり、用具材料の余剰と安全を鑑みて補欠であった 1 組も加えて 13 組まで受け入れた。その内訳は、幼児 7 名、小学生 6 名、保護者 8 名の合計 21 名であった。小学生はいずれも 4 年生以下であり、普段から周辺で一緒に遊んでいる仲間である。保護者はすべて幼児の親であり、中には両親と一緒にあるほか、母親に祖母まで三世代で参加の家族もいた (図 4, 5)。

最初に基本的な陶芸粘土の扱いなどを説明し制作に入ったが、その表現を心から楽しむ姿や友人・親子そして他人である参加者同士のコミュニケーションの様子などから、先行研究でも確認されてきた通り、各々が芸術活動に関わることで「ストレス緩和作用が得られるばかりでなく、自我状態にも飾り気のない素直な気分、現実逃避からの回復、協調性や自主性などの自信に富んだ、一種のカタルシス効果を及ぼしている」(1) 可能性を実感した。これについては改めて、J-POMS や社会性測定用尺度等を用いて測定する機会を持ちたいと考えている。

本プロジェクトは日本生命財団の助成を受けた共同研究「UR 団地での多文化共生の多面的プログラム提供と指導者育成」の一端も担っている。藤田優一(本学看護学部教授)を代表に加藤丈太郎(文学部講師)、堀江正伸(青山学院大学地球社会共生学部教授)、脇本景子(食物栄養科学部准教授)、大坪明(教育研究社会連携推進室長・特任教授)、そして筆者で構成される。武庫川団地で増え始めている日本語を母語としない家庭の特に子どもたちに着目し、タイトルにある実践を踏まえて学際的研究を進めるものである。その一環で食育や健康に関するワークショップなども開催している。参加者には共通の内容でごく簡単なアンケートを依頼しており、本プロジェクトでも同様に回答を得た。



図 5 ワークショップ (幼児と保護者)



図 4 ワークショップ (小学生)

設問と回答を次に示す。

<アンケート>

あてはまる数字にまるをつけてください

Q 1 あなたについてお答えください。

- ①保育園児・幼稚園児 ②小学生 ③中学生 ④高校生 ⑤保護者 ⑥社会人 ⑦その他

Q 2 参加して楽しかったですか？

- ①とても楽しかった ②楽しかった ③楽しくなかった ④まったく楽しくなかった

Q 3 武庫川団地にお住まいですか？

- ①はい ②いいえ

Q 4他に参加してみたいイベントはありますか？

- ①外国の生活をする事ができるイベント ②食事についてまなべるイベント
③図画工作、アートについてのイベント ④健康についてのイベント ⑤その他 ()

<アンケート回答> (回答数0の項目は無記載)

Q1

- ① 保・幼稚園児 6 ② 小学生 6

Q2

- ① とても楽しかった 11 ② 楽しかった 1

Q3

- ① 団地内 7 ② 団地外 5

Q4 (複数回答)

- ① 外国の生活 1 ② 食事 4 ③ 図工アート 8 ④ 健康 1
⑤ そのほか (音楽体験) 1 ⑥ 無回答 1

アンケート用紙は参加1組(子ども1名)に1枚配布した。幼児2名(姉・弟)の保護者がまとめて1枚に記入したために、回収枚数は12枚となった。また幼児の回答は保護者が聞き取りながら記入していたが、そこに保護者の意向が反映されていることも含み置かねばならない。小学生の回答は本人の意思と考えてよかろう。団地外からの参加という5組について完成作品受け渡し時に確認したところ、4組は実家が武庫川団地であり里帰りをしてきたとのことであった。残る1組は団地外(西宮市内在住)で、電車が大好きな子どものために、赤胴車を中心としたイベントの情報を得てやってきたということであった。事実この赤胴車は、武庫川団地に暮らす人々だけでなく全国の鉄道ファンからも愛され、団地内に常置後も見学者が途絶えることはない。地域の古くも新しいシンボルとして、少子高齢化や多文化共生など様々な課題を内包した団地に新たな関係性が紡がれる場となるであろうと筆者は確信しつつ、そこにアートが在る意味を明らかにし、武庫川団地における物語を地域が創る、その支えになりたいと思いを新たにした。

参加者全員が楽しかったと回答している。アート・ワークショップは様々な技法、展開が想定されるが、誰しもが幼いころに一度は経験したであろう泥んこ遊びや砂遊びなど、その延長線上



図6 成形直後の作品

で、土の感触を楽しみながら表現に没頭することになったと考えられる。扱いが簡単な陶芸粘土を選んだことで、細かなことに気を遣うこともなく親も子も伸び伸びとクリエイティブな時間を共有することになった。

子ども自身の作品、親子の合作、さらには保護者(大人)個人の作品と、それぞれ750gの粘土を全て使い切り、大小様々な個性的な作品群が完成した(図6,7)。

参加してみたいイベントについての問いには、アートが8名、食事は4名の回答があった。陶芸体験ワークショップに参加しているのであり当然の結果といえるが、次いで日常生活に欠かせない「食」についての関心が高いことは特筆すべきである。単純な生命活動には全く不必要で非日常と捉えられる「アート」、そして日々の営みに欠かせない「食」が並んで期待されている。もちろんアンケートの母数からその有効性は疑わしい。しかしここで再び、ヨーゼフ・ボイスの言葉が浮かぶ。全ての人が芸術家であり、日々の営みも全てアートだと考えるならば決して不思議ではない。大きな意味でのアートが社会の中で潤滑油のように浸潤し、影日向なく機能すること、それは一方でアートの死を招くかも知れぬが、筆者はそんなに柔なものではないと考えている。それを実証すべく、実践を重ねながらデータを蓄積し、研究を進めていく所存である。



図7 釉薬をかけて本焼き後の完成作品

引用文献

- (1) 近喰ふじ子「コラージュ制作が精神・身体に与える影響と効果－日本版 POMS とエゴグラムからの検討－」『日本芸術療法学会誌』31(2), 2000, p.74